

団塊の世代の一人のつぶやき

林 静子

春日井市民病院副看護部長(愛知県)

初めてのお産

私が看護学校1年生だった冬休みのことです。8歳年上の姉が、突然自宅で出産してしまいました。初産でした。

陣痛が来て、医者へ行く用意をしているうちに破水して、「もうダメ、生まれる」と、無介助出産で元気な男の子が生まれました。とにかく、家中がパニック。冬なのに赤ん坊は羊水で濡れたまま、拭いてももらえず、それでも元気に泣いていました。私はただ、お湯を沸かしているだけでした。

やがて近所の産婆さんが駆けつけてくれ、姉親子は助かりました。私たち家族も助かりました。

私は何もできず、情ないやら、悔しいやら……。とにかく2人が元気でよかったと安堵する気持ちも混じって、頭も心もグチャグチャでした。これが私が見た、初めてのお産でした。

今思うと8歳年上の姉は、初産でのこの体験はどんなにか心細く、おそろしいことだったでしょう。また、私の父母の心配もいかばかりだったか。

2人はその産婆さんの助産所に入院し、手厚い看護を受け、おかげ様で姉と甥は順調な産褥を過ごすことができました。

私はその後、助産婦の道に進みました。振り返ってみると、あの助産婦さんの技術、力量もすばらしかったけれど、特に冷静だったこと、さりげなかったことに感服しています。私が助産婦を志したのも、彼女のすばらしさが忘れられなかった

ことが大きいと思います。

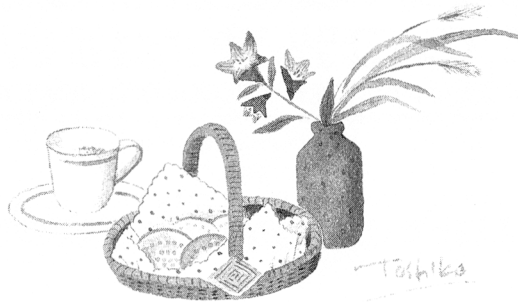
厚生省看護研究研修センターで

私は看護婦として働いた後、助産婦の道に進みました。その後専業主婦生活を経て、現職場に助産婦として復帰することができました。

そして3年前に、幸運にも厚生省看護研究研修センター助産婦教員養成課程に入学できました。クラスメイトは、私の甥と同年の人も何人かいて、感慨ひとしおでした。よくクラスの皆と一緒に出かけるとお店の人に、「どういうご関係ですか、親子ですか」と尋ねられたものでした。

センターでの生活は、文句なしにおもしろく、遅まきながら、学ぶことの楽しさを初めて知ったような気がします。東京は刺激的で、せわしなく、助産婦も施設にこもってなくて、元気いっぱいでした。東京人がことある度に「地方の人は……」というの、妙に納得できてしまう程、いなかと都会との差を感じました。

若い人たちといつも一緒にいて思ったのは、皆が優秀だということ。私のあの年頃は、全くひどいものでした。常識もなく、勉強もおそまつ、何もできないのに、ワイワイと「社会が」「医療が」と大きなことばかり言っていました。思い出すと本当に恥かしいことばかりです。今の若い人たちは、礼儀もわきまえているし、あまり言葉にはしないけれど、書いたものを見るとしっかりとした意見をもっています。頼もしいかぎりです。



「業務」って？

現在私は、管理部に配属されて3か月、病院の新築移転を目前にして、忙しい毎日を送っています。「看護とは」について考えさせられる日々でもあります。

スタッフのレポートで、「業務に追われて本来の看護ができない。業務に流されて、思うような看護ができない」という意見がありました。どう考えたらいいのでしょうか。問題意識があって、意欲的なのでしょうか。そして、いったい業務って何でしょう。看護婦(士)が本来の看護をできなくさせている業務とは、何でしょう。

私は、「看護婦(士)」として働いているのに、本来の看護でない業務で終わっている人って、いったい何者？」と思ってしまいます。医師の指示による仕事でも、看護の視点で行なっているはずだし、ルーティンの看護処置にも個々の患者さんに合わせて看護過程を踏んでいるのだし、と悩んでしまいます。

そのスタッフには、「やらされている」、「こなしているだけ」という気持ちがあるのでしょうか。やりがいを持って働いているのでしょうか。他職種に委ねるべき仕事が多いのでしょうか。

私は専業主婦になるため、一度職を離れたことがあります。その時、私にとって仕事が、これほどまで大きな存在であったのかと思い知らされました。主婦の仕事も奥が深く、やりがいのある仕事だと思いますが、それだけというのは、私には向いていなかったのです。

私には助産婦の仕事が、今でも、そして現在も、かけがえのない、自己実現の一つになっていることを実感しています。

これから

ボーっとして、何もできなかった私が、こんなに仕事好きになったのは、周りの人々のおかげだと思っています。上司、同僚、家族、患者さんたち、今までの出会いに心から感謝しています。私は不思議と人との巡り合わせがよく、本当に恵まれているなあと思います。

さて、今度は私が回りの人たちのために、力を尽くす番です。今のこの職場で働きたいと言ってくれる人たちのために、仕事がおもしろく、やりがいをもって働けるように、環境を整えることが、私に課せられた大きな仕事だと思っています。「本来の業務をやった」と言うことができるようにしていきたいし、若い人の力を十分発揮できる職場にしていきたいと思っています。

今は臨床にいた時とは違い、直接患者さん、妊産婦さん、新生児との出会いがなくなり、本当に淋しい限りですが、皆が少しでも輝けるよう、皆の智恵を合わせて大きな力にできるよう、今の立場で精一杯、力を尽くしたいと思っています。

私は、来たるべき高齢社会のやっかいいもののような団塊の世代の一員ですが、まだまだ一働きも二働きもできると信じています。

次は、故郷の豊橋を愛してやまない若きクラスメイトで、とてもお世話になった、青木美奈さんにバトンを渡します。